

オーダーメードの太陽光で世界を変える



カナダ生まれ、デンマーク育ち。ワーキング・ホリデービザで来日。滞在予定は6ヶ月だったが、大阪の人情と堺打刃物に魅せられ、日本が第二の故郷に。刃物メーカー勤務後独立し、「実際に触れて選べる」包丁選びのコンサルティングを提供する、ショールームタイプの店舗「タワーナイフズ」を経営。
<http://www.towerknives.com/>

包丁コンサルタント・和包丁専門店オーナー
ビヨン・ハイバーグ

世界から絶賛される「和包丁」は、職人が生み出す日本の伝統工芸品。今や、海外の星付きレストランのシェフをはじめ、その品質の高さは広く知られ、輸出高は年々伸び、和包丁を購入する観光客も増えている。

24年前に来日し、現在、大阪を中心にお包丁コンサルタントとして活躍するビヨン・ハイバーグさんも、和包丁に魅せられた一人である。

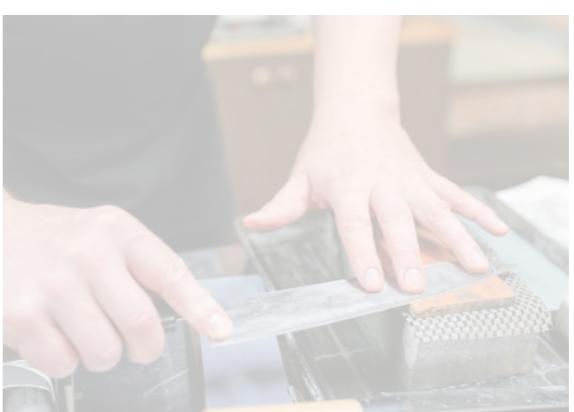
「私は、自分が納得できる本当に素晴らしい品を扱っています。それをわかつていただくには、試してもらうのが一番。実際、スライスしたトマトを口にするとき、皆さん、驚きますよ」

ありふれた食材が信じられないほどおいしく感じられるのは錯覚ではない。鋭い切れ味が断面の凹凸を減らすため、トマトのみずみずしさを損なわず、滑らかに切れるからである。

「断面がきめ細かいと、調味料もしつとり浸み込みます。つまり、良い包丁で料理すれば、刺身も野菜の煮つけもサラダもおいしくなります。しかも必要なメンテナンスを怠らなければ、40年も使えます。職人の手による『完璧

な道具』は少々値が張つても、その価値はあるのではないでしようか」

大阪・堺をはじめとする様々な産地の和包丁を扱う専門店のほか、東京への出店、さらにつくり手の「職人」と使い手の「客」をつなげる「刃物工房」をオープンさせるなど、夢を次々と実現させてきたハイバーグさん。その胸には、日本の手仕事への尊敬と、伝統の灯を消してはいけないという熱い想いが満ちている。



暮らしに口福を運ぶ和包丁 その素晴らしさを世界に

GLOBAL
EYE
日本の魅力

「和包丁は、切れ味が見事。熟練の職

人による、本当に良い品を知つてもらいたいと思い、私は国内外でその素晴らしさを伝え、応援しています」

ハイバーグさんの店では、300種類もの和包丁を展示している。野菜や

肉、魚など用途に応じた和包丁の特徴や使い方、メンテナンスを説明するだけでなく、自ら包丁を使って実演する。

「私は、自分が納得できる本当に素晴らしい品を扱っています。それをわかつていただくには、試してもらうのが一番。実際、スライスしたトマトを口にするとき、皆さん、驚きますよ」

ありふれた食材が信じられないほどおいしく感じられるのは錯覚ではない。鋭い切れ味が断面の凹凸を減らすため、トマトのみずみずしさを損なわず、滑らかに切れるからである。

「断面がきめ細かいと、調味料もしつとり浸み込みます。つまり、良い包丁で料理すれば、刺身も野菜の煮つけもサラダもおいしくなります。しかも必要なメンテナンスを怠らなければ、40年も使えます。職人の手による『完璧

な道具』は少々値が張つても、その価

値はあるのではないでしようか」

大阪・堺をはじめとする様々な産地の和包丁を扱う専門店のほか、東京への出店、さらにつくり手の「職人」と

使い手の「客」をつなげる「刃物工房」をオープンさせるなど、夢を次々と実

現させてきたハイバーグさん。その胸には、日本の手仕事への尊敬と、伝統の灯を消してはいけないという熱い想

取材・文／ひだい ますみ 写真／斎藤 泉



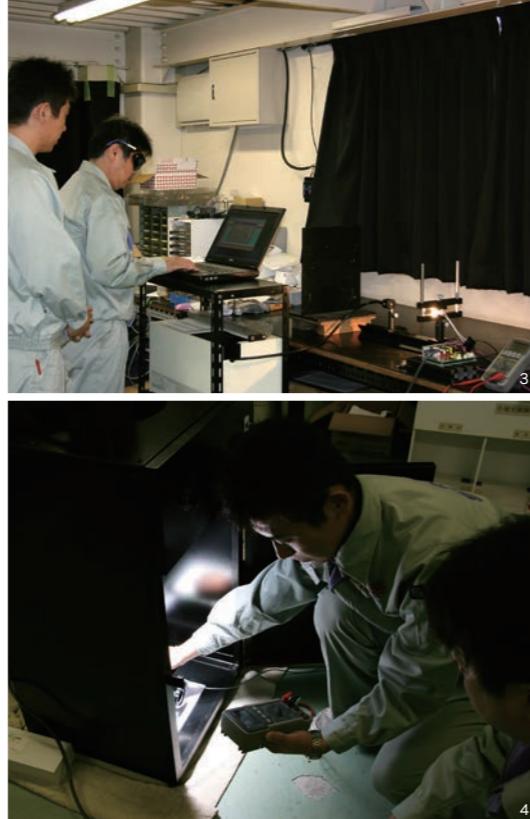
1. 創業者(現会長)の佐藤泰司さん。

2. 太陽電池モジュール評価用のソーラーシミュレーター。

3. 新たな製品開発のため、キセノンランプの分光特性を測定。

4. 光源装置の照射強度を測定し、ムラがないことを確認する。

5. 太陽光同等の平行な光を出す「平行光照射装置」。



セリック株式会社
代表取締役社長
佐藤郁夫さん



「蛍光灯や白熱電球などの一般的な照明ではすべての色を正確に見ることができず、JISでは“太陽光の下で見た色を正確な色とする”と定義されています。そこで私たちが自然太陽光に代わる色彩評価の『ものさし』としてお勧めするのがSOLAXです」

現在でも色彩評価や調色は、目視検査で確認を行うことが少なくない。その際、光源として使われてきたのが、すべての色が連続的さんは次のように話す。

セリック株式会社の照明器具「人工太陽照明天の日の午前10時から午後2時に地球に届く太陽光と同じ特性を持つ。その有用性について、セリック株式会社代表取締役社長の佐藤郁夫さんは次のように話す。

に含まれる太陽光である。昔から色にこだわる画家などは、太陽光の下で制作を行つてきただ。だが、太陽は届しか出ないし、雨や曇りの日もある。24時間365日いつでも太陽光を提供できるのがSOLAXだ。

子どもの頃の体験から 人工太陽照明灯を開発

そもそもセリックは、佐藤さんの父である創業者の佐藤泰司さんが、人工的に太陽光をつくろうと設立した会社だ。

「中学生の時に絵を描く宿題があり、夜に白熱電球の下で描いたそうですが、翌日太陽の下で見たら全然違う絵に見えたそうです。その後、船舶用サーチライトの開発でキセノンランプと出会い、これを使えば子どもの頃夢に描いた太陽の光を自らの手でつくれる、と一念発起して立ち上げたのが当社です」

キセノンランプが太陽光に近い光源であることは以前から知られていたが、照明として使用するには大きな欠点があった。それは、特殊で大型の電源装置が必要なこと、そして紫外線が多く出ることだった。

泰司さんは、当時登場した半導体を利用すれば電源装置を小型化でき、フィルターを用いることで、波長を調整して紫外線を取り除くことができると思ったのだ。

「太陽光の色を実現するためにキセノンランプにフィルターを付けるのですが、そのためには6種類のフィルターが必要でした。ところが6枚のフィルターを重ねると、光が弱くなってしまう。そこで、1枚のフィルターに蒸着するという方法を考えました」

ところが6枚のフィルターを1枚にするというのはフィルターメーカーにとつても困難な挑戦であり、完成までには大変な苦労があつたという。

様々なオーダーに応え、 ノウハウを蓄積

創業から2年、1986年に「XP-1300形人工太陽照明灯 SOLAX」を発表すると様々な業界から反応があった。

写真フィルムメーカーからの相談は、人工太陽照明灯をセットした撮影スタジオをつくれないかというものだった。フィルムメーカーは、自社フィルムのアピールのためにモデル撮影を行うが、太陽光の下での撮影が必要なため、撮影日には羽田空港に集合。その日、天気予報で晴れとされる場所にスタッフ全員飛び、撮影を行っていたという。その費用は膨大で、スタジオをつくるほうが経済的で効率もよいというのだ。

さらに大口の顧客となつたのが自動車業界。車体の塗装の色合わせは従来の照明では難しく、太陽と同じ光で検査する必要があるからだ。

中には、光の成分を変えることができないかという相談もある。例えば、色を見るだけなら紫外線は必要ないため、紫外線を除去してほしいという要望だ。他方、太陽光で塗装

カーエレクトロニクス業界だという。現在、同社の製品の導入が進んでいるのが

時代の最先端の研究分野にも活用されるSOLAX。今後は海外への販売も本格的にスタートする予定で、まず中国とトルコに拠点を設け、輸出を本格化するという。オーダーメードの太陽光がどのように評価されるのか。期待は高まっている。

などがどう変化するかという曝露試験の場合には紫外線は絶対に必要になる。既製品ではなくオーダーメードの製品は売り上げの約半分を占めるという。こうして顧客のオーダーに応えて製品を開発していく中で、セリックには様々なノウハウが蓄積された。

「ある業界では当たり前のことが、他の業界では画期的と受け止められることがあります。多くの分野で経験を積んできたことが当社の強みとなりました」



持ち運び用に開発されたSOLAX-iO。LEDを使用した充電式コードレスのため、狭い場所や光が届きにくい場所でも色彩評価が可能となる。



光源によって色が変わつて見えることを示す比較装置。右:SOLAX、中央:蛍光灯、左:白熱灯。

セリック株式会社
1984年創業の電機機械メーカー。1986年に世界で初めて人工太陽照明灯SOLAXを開発。美術館、百貨店、電機器、写真工業、自動車メーカー、化粧品、塗料調色、医療など幅広い業種・業界で使われている。創業者でSOLAXを開発した佐藤泰司氏は、黄綬褒章、東久邇宮記念賞、科学技術庁長官賞などを受賞・受賞。
<http://www.seric.co.jp/>